

アジ歴 5 年のレビューと新しい展開

石井 米雄

国立公文書館アジア歴史資料センター

※本稿は、アジア歴史資料センター開設五周年シンポジウム「歴史が蘇る」(2006. 12. 8)での基調講演の記録です。

ご紹介いただきました石井でございます。

きょうは夢を見ているような気がしています。アジ歴ができるときに、お助けいただいた古川官房副長官の顔を拝見し、実質的に事務局長の役をしてくださった谷野外政審議室長、それから、旭外政室審議官の顔を拝見しながら、あれからもう12年たってしまったのかという思いにかられております。

平成6年8月30日に、翌年の終戦50周年を踏えた内閣総理大臣の談話がありましたが、そのなかで平和友好交流計画が出され、その一環として、アジア歴史資料センターの創設が提唱されたわけです。これを受けて、同年11月にアジア歴史資料センター設立に関する検討のための有識者会議ができました。その座長は慶応義塾大学の前の塾長であられた石川先生で、副座長が今お話いただいた細谷先生でございました。

私はたまたま有識者会議書記役をさせていただきましたので、結果的には答申を執筆することになりました。当初は、とにかく何とかして資料を集めて、提供しようということだったんですが、話はそうなかなか簡単にはいかず、結果的には、提案が出されてから7年間が過ぎてしまいました。

理由の一つは国内の政治的な問題でしたが、近隣諸国からも、あんなことをやっているけれども、日本はどうせ隠すにちがいないという疑いがかけられ、内外ともに白い目で見られているという感じがいたしました。私自身もどうしてこんなに問題になるのかなと思っていました

が、今申しました古川官房副長官とか谷野大使、旭審議官など皆さんのご努力によって、やっと発足したのが5年前の11月30日でございます。

私はまさか自分がセンター長になるとは夢にも思いませんでしたが、責任を感じまして、今日までセンターをお預かりさせていただき、あっという間に5年間が経ったというわけでございます。アジ歴の創設に当たりまして、有識者会議では、アジアに関する関係資料を収集し、保存し、整理して、検索を可能にすることを目標とし、まずできるだけたくさんの資料を集めようと考えました。それから、どんな資料があるかという、資料の素材に関する情報も集めて提供し、さらに、国内外の関係機関とか施設とも協力して情報を交換しようというのが出発点だったわけですけれども、そう簡単にはいきませんでした。

結果として、その資料はまず公文書に限ろうということに決まり、7年後にようやく「アジ歴」が誕生したわけです。提供する史料について当面は、国立公文書館にあるアジア関係の資料と、外務省の外交史料館、それから、防衛省の防衛研究所の図書館、この3つの所蔵資料にかぎることに決まりました。そんなわけで、答申を書いたときよりはだいぶ小さいものになりましたが、それでもこの3つの館のものを全部合わせると膨大な数の史料になります。

5年目の現在、1,260万画像、1画像は大体1.5から、場合によっては2ページでございますから、それだけでも既に3,000万ページ、あ

るいは4,000万ページに近いものができ上がっているわけであります。これが全部完成したら大変膨大な量になるわけで、それが全部デジタル化され、提供されるようになったわけであります。

現在では、インターネットを通じまして、日本政府が保有する戦前の公文書を、これは我々のうたい文句ですが、「いつでも、どこでも、誰でも、ただで」と。この「ただで」ということを学会などで発表するとすぐ拍手がおこります。

今の日米交渉もそうですけれども、その前の日露とか岩倉使節団とか、特別展には非常に関心が持たれます。最初のころ九州から「特別展」をみるためにわざわざ上京して来られた方があったんですね。「ここにお出でいただいても何もないので、ご自宅のパソコンで見てください」と言ったら、旅費をもらってしまったのでしょうがないので来てしまいましたというような笑い話があります。現在「アジ歴」の資料は、北海道から沖縄までおおぜいの方に使っていてありますし、大学院生などもたくさん使っていていただくようになりました。私が属している東南アジア史学会のようなところでは、一種の資料革命が起こっているということも言われています。

最近、近隣諸国との間に歴史認識を巡るさまざまな議論があります。日本はまじめに歴史を考えていないじゃないかと言われるんですが、私はこの「歴史認識」という言葉をそう簡単に使っていたくないなという感じがします。

一つエピソードをお話しさせていただきますと、昭和22年、私は旧制高等学校の1年生でありましたけれども、当時は着るものがなくて、学生服を着ている者はほとんどいなかったのですが、軍の払い下げのぼろぼろの軍服を来ておりました。私は、今はなくなった例の『君の名は』で有名になった数寄屋橋を歩いておりましたら、向こうからアメリカのG Iが8人ぐらい、一列

横隊で来たんですね。明らかにこっちから来る人間を通させまいという姿勢が見えたわけです。だけど、私は数寄屋橋から日比谷公園の方に歩いていく途中だったので、しょうがないので歩き続けて行きましたら、途端に拳骨でぽかっと殴られ、目がクラクラしました。私は戦争世代ですから、教練ではビンタというのを何遍も食らったことがあるんですが、拳骨で殴られたのは初めてなんですね。拳骨で殴られると痛いものだなと。そのG Iはゲラゲラ笑いながら行ってしまったというわけです。

「歴史認識」というときに、いつもこの自分の体験を思い出すわけです。私は復員兵ではありません、当時私は16歳でした。我々の先輩はもちろん戦争に行きましたけれども、私は兵役には服していない。しかし、たまたま着るものがないから軍服を着ていたわけです。ところが、そのG Iは「これが憎っき日本兵だ、戦友の敵を討ってやる」というので殴って、向こうは大変いい気持ちだったと思うんですね。殴られた私はいい迷惑でありまして、私は全然関係ないのに何で殴ったんだらう、こんちくしょうという気持ちですね。

数寄屋橋で軍服を着た一高校生がG Iに殴られたというのは客観的な事実です。ところが、G Iの方の歴史認識は、戦友の敵を討ってやっですっきりしたと。私は「痛てえな、このばかやろう」というような感じだった。歴史事実の一つなんですね。しかし、歴史認識というのは、殴られたやつと殴ったやつとは全く違う。最近よく「歴史認識を共有しよう」という話がありますけれども、歴史認識を共有する前に、まず歴史事実を確認する、それが一番大事だと思っているわけです。アジア歴史資料センターが役に立つことがあるとしたら、それに基づいてさまざまな歴史認識がつけられるであろう歴史事実というものを、広く世界に公表することだということです。

もう一つ、エピソードをお話しさせていただきます

ますと、アジ歴ができて、オープニングがあって、その次の次ぐらいの日だったと思いますが、日本のある英字紙に「今度、アジア歴史資料センターというのができた。だけど、この資料センターの資料はいわゆる15年戦争のものは一切出されていない。」という記事が出たんです。

私はびっくりしまして、すぐにそこへ電話しました。そしたら、人のよさそうなアメリカ人が「これは某通信社から来たのをそのまま載せただけで、私たちが悪いわけではないんだ」と。「あんたは大変悪いことをしているんだ。こういう間違っただけを言ってもらっては困る」と。私はあまり怒るのは得意ではないんですけども、そのときばかりは本当に腹が立ちまして、それこそ「このばかやろう」という感じを持ったわけです。4日後に訂正記事が小さく出ました。しかし、その明るる日に既にシンガポールの英字紙には「日本はあんなことをやっているけれども、結果的には隠している」という記事が出ました。

そういう意味で、近隣諸国の方がお出でになると、必ず都合の悪い資料は隠しているだろうと言われるわけです。特に中国の方、韓国の方がお見えになって、アジ歴にお出でいただくとみんな顔がこわばっている、敵地へ乗り込むようなつもりで入って来られるんですね。ところが、帰るときにはほとんどみんなにこにこしながら帰っていく。それは大変うれしいことなんです。ですから、私は中国の方や韓国の方がお見えになると、これは極秘であって、人には見せないであろうというものをわざとお見せするんです。

例えば奉天総領事から東京の外務省あてにきた電報がありまして、ある鉄道を爆破したのは、支那の匪賊によってされたんだといわれているけれども、事実は日本の陸軍がやったらしい、とすっぱ抜きをやっているわけです。そういう記事を実際にお見せするんです。そのときは何

もおっしゃいませんけれども、我々のアジア歴史資料センターに中国語の専門家がおられまして、その方がホテルまでお送りしたときに、現在、北京にありますアーカイブの一番大きな檔案館の局長さんが「あんなものまで出しているのかね」と言っていたということを聞いて、私は本当にうれしく思ったわけです。

そういう意味で、アジ歴は、今申したように資料はできるだけたくさん出す、どんどん出していこうというつもりでやっているわけでございます。最近ではそれがだんだんわかっていただいて、政府文書、明治から1945年までが対象になっているわけでありまして、それを例えば1951年までに延ばすとか、あるいは、もっと後までやるというようなご希望が出ております。とにかく1945年だけでもまだ半分しかありません。膨大な資料でありまして、3つの館だけでもあと10年ぐらいかかるのではないかという感じがしています。現在のところこのアジ歴の利用者の大半は研究者であります。ですから、研究者がお使いになって、特に博士課程の学生さんとか、修士課程の方が使っていただくと大変うれしいのですが、もっと広く使っていただきたいなと思います。

皆様もお気づきだったと思いますけれども、先日、朝日新聞の夕刊の第一面に、「敵艦見ゆ」というのでZ旗を掲げた有名な「皇国の興廃この一戦にあり」というあの電報が出ていました。記者に見せたら喜んで、すぐ持って帰って記事を書いてくれたので、一面に出たとは本人自身も驚いたくらいです。そうなりますと、アジ歴へのアクセス数がばあっと上がりまして、我々にとっては大変うれしいことなんです。

今申したように既に1,250万画像も提供しているということで、外から来た方は「何百人でやっているんですか」と言われます。もちろん、防衛省、国立公文書館、外務省外交史料館のお助けをいただいているわけですが、実際にアジ歴でやっているのは文部科学省と外務省から出

向されている方10名足らずであります。非常に大事なことは、歴史学を専攻している大学院生の諸君に実に献身的な努力をしていただいているので、そういう方のボランティア的なお助けがなければ、この仕事はとてもできないわけがあります。

『文藝春秋』にアジ歴のことを褒めて書いてくださった塩野七生さんは、アジ歴はこんなに小さいのでは駄目だ、もっと大きくしろと。今、予算は4億なんですけれども、これを40億にしろと。40億はちょっと多すぎるような気もするんですけれども、いいことをやっているんだからもっと大きくすべきだし、人ももっと増やすべきだということをお願いいただいています。そういう意味で内野席・外野席の応援団は大歓迎でございますので、ぜひお助けいただければありがたいと思います。

私は、とにかく限られた定員と予算でやっておりますが、できれば組織と予算をさらに拡大したいと念願しております。

アジ歴をご存じない方はまだ多いんですけれ

ども、例えば高等学校の先生とか中学校の社会科の先生に資料をごらんいただいて、それを生徒さんに見せて、歴史資料というのはこういうものなんだということを実際に見ていただくことができれば本当にうれしいと思います。

繰り返しますけれども、この12年間を顧みますと、本当に夢のような感じがします。5周年記念ということでこういう新しいことができたことは本当にうれしいと思います。これは利用者の皆様、関係者の皆様の絶大なお助けによってできたということでありまして、我々は頑張っただけで今の線をさらに深め、かつ拡大していきたいと思っております。この後、牟田さんから、新しいシステムを導入することによって少し利用がしやすくなりましたし、いろいろな意味でご利用いただく方にとって、今までよりもさらに使いやすくなるということで、具体的なデータを示しながらご理解いただきたいと思います。

きょうは本当にお忙しいところをありがとうございました。